

ミライの日本語教育のために ーベトナム・ハノイ/ハイフォン インタビュープロジェクトー

浅見昌弘（武蔵野大学グローバル学部日本語コミュニケーション学科3年）

勝又結衣（同上）

八尋はるか（同上）

1. はじめに

この活動を始めたきっかけは、私たち自身が日本語教師を目指そうとしたときに、日本語教育に関する情報が少ないと感じたことです。日本語教師にどうやったらなれるのか、どのようなどころで学ばばいいのかなどの情報をどうやって集めればいいのかわかりませんでした。そしてそれ以上に日本語教師がどのような働き方をしているのかを知らなかった。

「日本語教育能力検定試験 全科目受験者 年代別比 推移⁽¹⁾」によると20~29歳の受験者数は、平成17年は2835人でしたが、平成30年にはその半分の1425人になっています。このことから日本語教育に興味のある若者が少ないのは、日本語教師の認知度の低さや情報不足が理由だと考えました。

この問題に対する私たちの解決策はブログ「[ミライの日本語教育のために](#)」（このブログでは、読者をミライの日本語教師と呼んでいます。ミライの日本語教師とは、日本語教師志望者および日本語教師志望者になる可能性のある若者の総称です。）を通して若者向けに情報提供することです。日本語教師志望者にとって有意義になることはもちろん、日本語教師に対する認知度を高めることで日本語教師志望者を増やせるのではないかと思いこの活動を始めました。

2. 各日本語教育機関の概要及びインタビューについて

本稿では、インタビューさせて頂いた日本語教育機関の日本語教師のインタビューとその教育機関の概要、日本語学習（授業見学させてい

ただいた教育機関のみ）について訪問順にまとめます。

また7節の小西達也先生はハイフォン公立大学のご所属ですが、前職場の名古屋大学日本法教育研究センターまでお越しいただき、インタビューをさせていただきました。

ブログ掲載予定の記事は[こちら](#)より閲覧できます。あわせてご覧ください。

3. 大塚武司さん（国際交流基金ベトナム日本文化交流センター）

3-1 教育機関概要

国際交流基金ベトナム日本文化交流センターは、公的機関である独立行政法人国際交流基金の海外拠点として、ベトナム文化スポーツ観光省の承認のもとで2008年3月に開設されました。様々なベトナムの政府機関、団体と共同し、また、協力、支援を得て、教師・学習者支援、助成事業、JF講座、日本語パートナーズといった活動を展開しています。

3-2 大塚武司さんインタビュー

国際交流基金ベトナム日本文化交流センターの日本語専門家として勤務されている大塚武司さんに現在のお仕事の内容とこれまでのキャリア、仕事のやりがい、ミライの日本語教師へひとことの3つを伺いました。

現在は日本語専門家として、JF講座の運営、コースブック『まるごと』のベトナム語版の出版、説明会やイベントを通じたJF日本語教育スタンダードと『まるごと』の普及活動、eラーニングの『みなと』の普及、などのお仕事をされています。

大塚さんのキャリアの変遷は、大学卒業後、出版流通の会社に入社され、5年間システム関係のお仕事に就かれたことから始まります。その後、海外で働きたいという思いをもたれ、働きながら日本語教師養成講座に通われていたそうです。そして韓国のSamsung社で3年間、社員に日本語を教え、帰国されてからは、早稲田大学の大学院で修士号を取得されました。その後は株式会社アルクで日本語教育事業に10年間携わられ、今に至るといいます。今の職場ではベトナム人とともに勤務する中で、日本的なやり方とベトナム的なやり方の違いに戸惑うこともあるそうですが、それも楽しさであり、互いに異文化理解をしながらお仕事されているということでした。

将来の日本語教育としては、学習者の学習する力に焦点を置き、研究をする人が増えることを期待されていました。また、読者であるミライの日本語教師へのひと言として、将来は何があるかわからないため、遊びであれ、好きなことであれ、今やりたいことを一生懸命やり、突き詰めるのがいいとおっしゃっていました。



図1 大塚武司さんインタビュー

4. 内藤真知子先生（ハノイ国家大学人文社会科学大学）

4-1 教育機関概要

まず、日本研究学科長の Vo Minh Vu 先生にお話を伺いました。ハノイ国家大学人文社会科学大学は、1992年に日本語教育を開始しました。現在、約700名の学生が日本語文化学部にも所属しています。今回伺った東洋学部日本研究学科

は、日本語を学習するための外国語学部ではなく、日本について研究する機関であり、日本語の教育も重視しているようですが、あくまで日本研究をするための日本語教育を行っているそうです。

4-2 内藤真知子先生インタビュー

次に、JICAシニア海外ボランティアとしてハノイ国家大学人文社会科学大学に勤務されていた内藤真知子先生にこれまでのキャリアと未来の日本語教育の2つを伺いました。まずはキャリアについてです。内藤先生は日本語教育能力検定試験の第一回の合格者です。同じ年にAJALTに入会し、主にビジネスパーソンを対象にした日本語教育からスタートしました。1989年からは国際救援センターで、主にベトナムからのインドシナ難民に「生活のための日本語」を教えるようになりました。その後も引き続き条約難民や第三国定住難民への日本語指導を行ってきました。先生はビジネスパーソンに教えることは一種の商品提供の面があるが、難民に教えるのは彼らの必死さや必要性などを直に感じる事ができて、その点にやりがいを感じるとお話しされていました。

将来の日本語教育については、「日本語教師という仕事は人と人をつなぎ、国と国をつなぎ、結果として社会を変える可能性のある仕事。信念を持ってなりたい教師像を描いてほしい。また、自分自身の日本語運用力を向上させて、伝達力のある音声表現力を身につけてほしい」と仰っていました。



図2 内藤真知子先生インタビュー

5. サイブ千賀先生 (Japan Vietnam Medical & Care Human Resources Consultants)

5-1 教育機関概要

Japan Vietnam Medical & Care Human Resources Consultants (以下JVMCHR社とする)は、主に介護留学事業に力を入れているコンサルティング企業です。その中に教育部を持ち、日本語能力試験N5～N3の日本語教育を行っています。現在250名以上の留学生を日本に送り出しており、今年からは介護技能実習生向けの日本語教育・介護教育を始動させました。さらに、ベトナムに有料の老人ホームを建設し、日本で育った優秀なベトナム人介護士を再雇用する循環プログラムを今後実施する計画もあります。また、奨学金による留学プログラムを創設し、日本での生活補助など学生に対するサポートが充実しています。

5-2 日本語学習について

JVMCHR社では、1教室当たり教師1名に対して学習者6～14名程度が日本語を勉強しています。学習教材は教師が用意したプリントを使用していました。この機関では「褒めて伸ばす」ということを大切にされています。

実際に、授業見学をさせていただいて、教師が実習生をたくさん褒めることで、教師と実習生との距離がとても近く、雰囲気の良い授業だと感じました。

5-3 サイブ千賀先生インタビュー

次にサイブ千賀先生にお話を伺いました。まずキャリアについて、サイブ先生は日本の大学でベトナム語を専攻していたそうです。卒業後、シンクタンクでJICAベトナムプロジェクトの業務調整員として2年務め、その後アメリカ人と結婚され、アメリカとオーストラリアで3年ずつ過ごし、日本に帰国後、2010年に日本語教育能力検定試験に合格し、長崎で非常勤講師として日本語教師を始めました。お子さんが独り立ちしたことで、自分のやりたい仕事をしようと、ベトナムで働くことを決めたそうです。大学時代に言語を学んでいたことから、第二外国語とし

て日本語を学ぶ学生の気持ちに共感できると仰っていました。学生を1人の自立した人間として考えて接し、今できないこともいつか絶対できると信じてあげることが大切だと言います。

ミライの日本語教師に対して、独りよがりの教育方法ではなく、教師同士のコミュニティを築き、互いに共有し、高め合ってほしいとお話しされていました。自分の指導方法に自信を持つことも大切ですが、常に勉強する気持ちを忘れず、より良い授業ができるように考える必要があると思いました。



図3 サイブ千賀先生インタビュー

6. 神谷英里先生 (名古屋大学日本法教育研究センター)

6-1 教育機関概要

名古屋大学日本法教育研究センターは、名古屋大学がハノイ法科大学内に設置した教育機関です。ハノイの他にベトナム南部のホーチミン、ウズベキスタン、モンゴル、カンボジアなどにも同様のセンターがあり、市場経済への移行など経済的・社会的改革を進めるアジア諸国に対する法整備支援事業を行っています。

学生は、ハノイ法科大学のカリキュラムとは別に名古屋大学のプログラムの授業も受け、日本語と日本の法律を学んでいます。ハノイ法科大学は司法省が直接管轄する唯一の大学、法曹養成のための単科大学で、数多くの法曹を輩出しています。大学院も設けられており、さらにセンターの学生は日本の大学院に進学できるチャンスがあります。

6-2 日本語学習について

名古屋大学日本法教育研究センターには、日本語の授業と日本法に関する授業の2種類があり、名古屋大学から日本語講師と日本の法律を教える法学講師それぞれ1名が派遣されています。日本語の授業は一学年週に7コマ行われています。初級の授業では日本人と話すということに重点を置いており、センターにやってくる日本人ボランティアと話すという課題が出されます。日本法を理解するための授業では、日本の新聞の社説やNHKのクローズアップ現代などが使用されています。

6-3 神谷英里先生インタビュー

まずはキャリアについてお聞きしました。大学卒業後、ワーキングホリデーでオーストラリアに滞在した際に、母語なのに日本語をうまく教えられなかった経験があったことから日本語教師を志したそうです。日本語教師養成課程を経て、青年海外協力隊の日本語教師隊員としてカンボジアで教壇に立っていましたが、帰国してからプログラミングの企業に就職し、そこで日本語教育工学に興味を持ち大学院に進学。卒業後は様々な国で日本語教育を行い、現在は名古屋大学日本法教育研究センターに所属しています。

やりがいに関してお話を伺うと、教えた学習者が5年、10年してから日本に関係する仕事に就いたり、自身のプラスになっていたりなど、社会の一員として活躍している姿を見ることができたときに嬉しく思うと仰っていました。

ミライの日本語教師に対しては、日本語を教える以外にも+αで学習者に教えられる何かを身につけてほしいとお話しされていました。



図4 神谷英里先生インタビュー

7. 小西達也先生（ハイフォン公立大学）

7-1 小西達也先生インタビュー

小西先生は大学在学中から日本語教育を専攻され、卒業後は中国の大学で2年間日本語教師として活躍されました。帰国後は大学院に進学し、その後からベトナムのハイフォンで日本語教師をされ、1年後に名古屋大学日本法教育センターへ着任されました。そして今年9月より現在のハイフォン公立大学で勤務されています。

今のお仕事のやりがいは、ただ学生を教えるだけでなく、ハイフォン公立大学、ハイフォン市内の日本語教育全体を見て仕事ができることだそうです。

ミライの日本語教師へは、いろいろなことを経験し、それを通して主体性・対応力・コーディネート力などを培ってほしいとのことでした。



図5 小西達也先生インタビュー

8. 松浦真理子先生（株式会社ITM）

8-1 教育機関概要

株式会社ITM（以下ITMとする）の日本語センターでは、技能実習生、技術者、留学生などを対象に日本語教育を行っています。ここでは規則・規律を守る習慣を身に付けさせるために寮生活が導入されています。主に来日前の技能実習生が日本語や日本の文化、習慣を学習しています。2016年9月までに4930人の学生が日本へ派遣されました（株式会社ITM JAPAN, 2019）。

実際に施設を見学して、ルールを守る、指示を理解し実行するというのを徹底的に教育されていることがわかりました。施設の壁には報連相（報告・連絡・相談）や5S（整理・整頓・

清掃・清潔・躰)の掲示(図6参照)があり、学習者たちの過ごす寮内は整理整頓がきちんとされ、とても清潔でした。(図7参照)

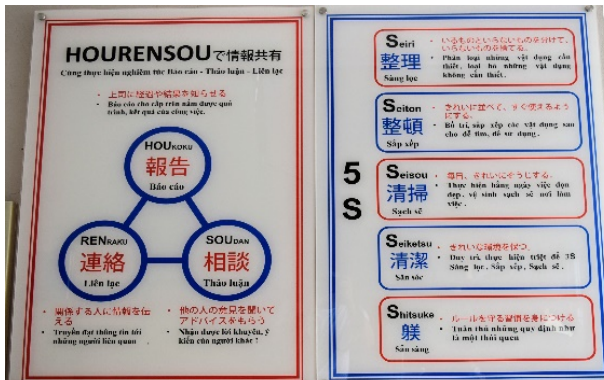


図6 報連相・5Sの掲示



図7 きちんと整頓された下駄箱

8-2 日本語学習について

ITMでは、1教室当たり教師1名に対して学習者20名程度で、教科書は『みんなの日本語』を使用しています。

学習者の方は、日本人の私たちにとっても強い興味を持ち、「日本のどこから来ましたか?」「大学で何を勉強していますか?」などいろいろ質問してきました。またこちらからの「日本へ行きたいですか」という質問に対しては日本に対する希望を語ってくれました。



図8 学習者の方々

8-3 松浦真理子先生インタビュー

松浦真理子先生にインタビューを実施し、現在のお仕事の内容とこれまでのキャリア、読者であるミライの日本語教師へひとことの3つを伺いました。現在のお仕事はITMが実施する日本語教育全体の指導改善、センター内の管理、人事、教師の育成、来客対応などです。

キャリアについて、松浦先生は銀行員・旅行会社勤務を経て日本語教師になったそうです。日本国内の日本語学校で非常勤講師からスタートして、数校で教務主任をされていました。その後ベトナムにわたり、現在の職に就いたそうです。

最後にミライの日本語教師に対しては、「なんでも経験してみる、そして話を聞くより実際に見てみるのが大切」とおっしゃっていました。私たち自身今回の見学も、技能実習生がどのような所で日本語を学び来日しているのか、実際に来て見てみなければわからないことだらけだったので、とても共感しました。



図9 松浦真理子先生インタビュー

9. おわりに

この「ミライの日本語教育」プロジェクトは、今まで日本国内の日本語教育関係者にインタビューし、ブログを発信していました。今回ベトナム・ハノイでのインタビューによって、日本とベトナムの日本語教師の働き方を比較し、ブログの読者に新しい選択肢を伝えることができます。教育機関への見学を通して、どの教育機関の学習者もそれぞれの目標に向かって熱心に日本語の勉強していることがわかりました。日

本語教師も、学習者の期待に応えるため日々授業はもちろん、教師教育や事務、人事などを兼任している先生が多く、目の前の学習者のために、ひいてはベトナムの日本語教育全体の発展を想って取り組んでいることがインタビューを

通して伝わってきました。その想いをブログの記事を通して人でも多くの読者が日本語教育に関心を持ってもらえれば、私たちの活動はこれからの日本語教育に大きな貢献ができたといえるでしょう。

参考文献

- (1) 公益財団法人日本国際教育支援協会 (2018) 『日本語教育能力検定試験 全科目受験者 年代別比 推移』 <http://www.jees.or.jp/jltct/pdf/graphs/2018_jltct_3_nendaibetsu.pdf> (2019年10月21日アクセス)
- (2) 株式会社ITM JAPAN (n.d.) 『教育事業 | (株) ITM JAPAN』 <http://itmjapan.co.jp/itm/?page_id=39> (2019年10月21日アクセス)